

第1日曜日
主日第一礼拝 9:00～
主日第二礼拝 10:30～
その他の日曜日
教会学校 9:00～
主日第一礼拝 9:00～
主日第二礼拝 10:30～

日本基督教団 麻布南部坂教会会報

2021 (令和3年) 11. 14

牧師 松谷 祐二

〒106-0047 東京都港区南麻布4-5-6 Tel & Fax 03 (3473) 1276
E-mail church@nanbuzaka.com http://www.nanbuzaka.com/

印刷 有限会社 創文社 Tel (3491) 8321

祈祷会
第2日曜日 礼拝後
成人会
第3日曜日 礼拝後
婦人会
第4日曜日 礼拝後
教会附属 南部坂幼稚園

「荒れ野で、神である主に会う」

牧師 松谷 祐二

イザヤ書 第四〇章三～五節、九～一一節

呼びかける声がある。主のために、荒れ野に道を備え、わたしたちの神のために、荒れ地に広い道を通せ。

谷はすべて身を起し、山と丘は身を低くせよ。

険しい道は平らに、狭い道は広い谷となれ。

主の栄光がこうして現れるのを、肉なる者は共に見る。主の口がこう宣言される。

高い山に登れ、良い知らせをシオンに伝える者よ。力を振るって声をあげよ、良い知らせをエル

サレムに伝える者よ。声をあげよ、恐れるな。ユ

ダの町々に告げよ。見よ、あなたたちの神

見よ、主なる神。彼は力を帯びて来られ、御腕を

もって統治される。見よ、主のちから得られたもの

は御もとに従い、主の働きの実りは御前を進む。

主は羊飼いとて群れを養い、御腕をもって集め

小羊をふところに抱き、その母を導いて行かれる。

(新共同訳聖書)

「主のために、荒れ野に道を備え、わたしたち

の神のために、荒れ地に広い道を通せ。」天の御

使いが大声で呼びかけます。わたしたち人間に。

わたしたち人間も含め、神の手によって創造され

たすべての生き物（肉なるもの）に。谷に山に

丘に、険しい道、狭い道に。ありとあらゆるもの

が、「荒れ野に道を備え」て、その道をまっすぐ

に進んで来られる方をひれ伏して拝み、迎えます

れ、と呼びかけられています。

その道を進んで来られる方こそ、主です。わた

したちの神です。わたしたちは皆、この呼びかけ

に従うなら、「荒れ野」でわたしたちの神、主に

お会いできるはずなのです。

「荒れ野で、神である主に会う」。聖書の中で、これは非常に深い含蓄を持った主題です。昔、エジプトで四百年も続いた奴隷生活から救い出されたイスラエルの民は、モーセに率いられて「荒れ野」を通って、帰るべき「約束の地」を目指しました。彼らをエジプトから導き出した神、主は、シナイ山に降臨してモーセと語られ、イスラエルの民は荒れ野で「主の栄光」を目撃します。

「荒れ野」は本来、人の立ち入るところではなく、獣の住まいです。水も食べ物も容易には手に入らないところです。わたしたち人間が、自力で生きることの限界を思い知らされる場所です。しかし、まさにそういう場所を選んだかのようにして、神である主は、「荒れ野」にイスラエルの民を導き、そこでご自身をあらわされました。神である主が備えられた水と食べ物によって彼らは養われ、導かれつつ「荒れ野」を旅しました。そういう中でこそ、彼らは自分たちを救ってくださる神、導いてくださる主を見出す機会を与えられたのです。

しかし、「荒れ野」に入れば、誰もが自動的に神である主を見出すことができたわけではありませんでした。「主を見出す」、「主に会う」とは、直接肉眼で見ることではなく、目には見えない神、主を信じ、信頼することだからです。人間に与えられるのは、「主の言葉」や「主の栄光」という、重要な、しかし間接的な手がかり。その手がかりを軽んじて、聞き逃し、見逃してしまえば、「主を見出す」ことはできず、目に映るのは「荒れ野」の不毛さばかりとなるでしょう。

荒れ野に入ると、イスラエルの人々の共同体全体はモーセとアロンに向かって不平を述べ立てた。イスラエルの人々は彼らに言った。「我々はエジプトの国で、主の手にかかって、死んだ方がましだった。あのときは肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられたのに。あなたたちは我々をこの荒れ野に連れ出し、この全会衆を飢え死にさせようとしている。」

(出エジプト記 第二十六章二～三節)

しかし、彼らの大部分は神の御心に適わず、荒れ野で滅ぼされてしまいました。これらの出来事は、わたしたちを戒める前例として起こったのです。彼らが悪をむさぼったように、わたしたちが悪をむさぼることのないために。

(コリントの信徒への手紙一 第一〇章五～六節)

しかし、もしわたしたちが「主の栄光」を見つめ、「主の言葉」を聞くことと切望しているのなら、事情は異なってきます。「主の栄光」「主の言葉」。この間接的な手がかりを通して、わたしたちは「荒れ野」の中でも、いえ「荒れ野」の中でこそ、わたしたちの神を見出し、わたしたちの主に出会います。

その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れられた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼料の桶の中に寝ている乳飲み子を見つけているであろう。これがあなたがたへのしるしである。」

(ルカによる福音書 第二章八～一二節)

わたしたちの神、主は進んで来られます。谷も山も丘も、険しい道も狭い道も、いっさいの妨げをものともせず、荒れ野に通された広い道を通す。すぐに。わたしたちの神、主は来られます。羊飼いとて。群れを養うため、導くために。わたしたちを慰めるため、わたしたちを救うために。

諸人こそぞりて、迎えまつれ

久しく待ちにし、主は来ませり、

主は来ませり、主は、主は来ませり

(讚美歌 一一二番)

イエス様の教えを通して神様の お導きに触れることができる喜び

佐 柳 理 久

近年頻繁に訪れる異常気象やなかなか収まらない民族・地域間での争いなどにより人々の不安が高まる中、二〇二〇年はオリンピック・パラリンピックイヤーということもあり、多くの人のとって明るい未来に向けた期待や希望の年であったかと思いません。ところがどうしたことでしょう、新型コロナウイルスという目に見えない相手に二〇二〇年はおろか、二〇二一年も引き続き脅かされる日々を送ることとなってしまいました。

しかしながら、このような時であるがゆえに、イエス様を通してたらされる神様のお導きや癒しがいかに大切であるかをあらためて感じる事ができたように思えます。

コロナ禍により礼拝自体が開かれなかった期間のみならず、仕事の忙しさにかまけて長いこと礼拝から遠ざかってしまった私にとって、再び礼拝に参加するようになったことは、あらためて礼拝の有難さを噛み締める機会をいただくこととなりました。

私たちは日々の生活の中で困難に直面すると、ともするとそれを単純に不幸なことだと思ってしまうことが多いかと思えます。しかし礼拝の中で聖書の読み解きを通してイエス様の教えを学ぶことにより、むしろどのような困難にも神様のお導きがあり、乗り越えるべく与えられた試練ののだと思えるようになると、あまり思い悩む必要がなくなるような気がします。

そういった意味では教会に連なりイエス様の教えを学ぶことができる我々は大変恵

まれた立場にあると思いません。更に、例えば教会に集うことができなくても、録音によってあたかも礼拝に参加しているようにしていただいたことには大きな意味がありますし、特に教会堂に集って礼拝が持てなかつた期間においても録音を続けて下さった松谷牧師と大司姉には大いに感謝をしたと思います。

このような時であるがゆえに、もつと多くの日本人がキリスト教のことに気づき、生活の一部に取り入れるきっかけになると良いような気がします。しかし、いつも不思議に思うのは、日本人が国際社会からその生き方を高く評価され、あたかもキリスト教の教えに近い生活の規範を持っているように見えるにもかかわらず、なぜこれほど信者が少ないのかということ。礼儀正しくて人に対して思いやりのある国民であり、例えば落とす物一つとっても無事に手元に戻ってくるなど、他の国では考えられないことです。もしかしたら日本人が古来から八百万の神を敬うという文化に慣れ、一神教にはなかなかなじめないということがあるのでしょうか。このことをいっつも不思議に思っています。

報 告

*十月三日(日)の礼拝で、今年四月以来半年ぶりに聖餐を執り行うことが出来ました。感謝です。

*十月十日(日)は神学校日・伝道献身者奨励日でした。教会学校礼拝、主日第二礼拝では、ヤング肇子神学生に説教をしていただきました。当日の席上献金は、神学校日献金として東京神学大学に送りました。

*港区のシティープロモーションポスターに、当教会の建物が掲載されました。区

が参加するイベント、展示会などに用いられる予定です。

《各部報告》

成人会

日時 九月十七日 主日礼拝後
場所 教会堂会議室
出席者 五名
開会祈祷 佐藤忠昭兄
内容 士師記 六章〜九章
臆病者のギデオオンが三百名の兵で数方の敵を滅ぼした神のご計画は？
神に義であり、信じ尽くしたギデオオンが「紫布の衣服」を求めたのは何故か？
息子のアビメレクは自己中心的、傲慢、残酷で指導者を目指すが、見栄っ張りの彼に訪れた最後は屈辱的な最期であったろう。神の怒りがこのような形で現れる等々、論じ合った。

婦人会

日時 九月二十六日 主日礼拝後
場所 教会堂会議室
出席者 八名
聖書研究 サムエル記下十五〜十六章十四節
ダビデ王に許されたアブサロムは聖地へブロンで反乱を起こす。エルサレムの戦乱を避けるためにダビデ王は家臣全員とエルサレムから避難した。荒れ野に向かう途中、王は神の契約の箱を都に戻させた。

その他 情報 柴田マリ姉の近況報告。
作業 十月十日教会冷蔵庫内清掃を予定
協議 婦人会計係から提案

日時 十月十七日 主日礼拝後
場所 教会堂会議室
出席者 四名
開会祈祷 ヤング肇子姉
内容 士師記 十章〜十二章
アビメレクの後、十二章までにトラ、ヤイル、エフタ、イブツァン、エロン、アブダンの六名の士師がイスラエルを裁いた。イスラエルの人々は主を離れ、主の怒りによって苦難を与えられる。しかし、主は十章十六節「主はイスラエルの苦しみを見るに忍びなくなつた」(聖書協会共同訳)とあるように、まるで肉の親の思いと同じような言葉で記されている。

次回十三章〜十六章 司会は下奥敏子姉

日時 十月二十四日 主日礼拝後
場所 出席者・開会祈祷 前回に同じ
聖書研究 サムエル記下十六章十五節〜十九章九節
アヒトフェルを伴いアブサロムはエルサレムに入城した。
ダビデはマハナイムでアンモン人シヨビ、ロ・デバル出身のマキル、ギレアド人バルジライによる食糧、生活物資の提供を受ける。ダビデは手兵の部隊を再編成し、ヨアブ、アビシャイ、イタイを指揮官とした。そして、彼らにアブサロムを手荒に扱わないよう命じた。ダビデの心は、以前は気に入らなかった、自分に謀反を興したアブサロムを憎み切れずに揺れ動いていた。アブサロムのイスラエル軍はダビデの家臣に敗れた。彼はヨアブに討たれ死んだ。ダビデは息子の死を悼み嘆き悲しんだ。
婦人会計係から報告と提案(均一献金を活動資金に)